

報告者 長坂 洵二

あいちホスピス研究会 公開講座聴講報告

【日 時】 2008年4月26日(土) 13:30~16:00

【場 所】 名古屋市ウイルあいち 【司 会】 永井路子さん、東海中央病院/渡辺院長

【演 題】 死の前で33年

【講 師】 徳永 進 氏 野の花診療所長

(略 歴)

- 1948年、鳥取県に生まれる。京都大学医学部を卒業
- 京都、大阪の病院勤務を経て、鳥取赤十字病院の内科医に
- 2001年12月、鳥取市内にてホスピスケアのある19床の有床診療所「野の花診療所」を始める。
- 1982年、「死の中の笑み」(ゆみる出版)で、第4回講談社ノンフィクション賞を受賞。
- 1992年、第1回若月賞(独自の信念で地域医療をしている人に贈られる)を受賞。



19床有床診療所(全個室)

〒680-0824 鳥取市行徳3丁目431

TEL 0857-36-0087

<http://homepage3.nifty.com/nonohana/>

一般医療全般(内科)とホスピスケアが中心です

【ようこそ…、徳永 進 Talk】

★死ぬのはつらいだろうな。だったらその時、その横に立っていて、手を握ってあげる仕事をしよう、と思ったのが高校2年生の時でした。★37年経って、ようやくそういう場に辿り着こうとしています。実際に行なうのは、一般内科と心の悩みの相談、お年寄りの往診が中心になるかも知れません。どれも同じに大切です。★看護婦さん、助手さん、食堂のおばさん、ケースワーカー、事務の人たち、と力を合わせて地域住民の人たちに、多くの人々に愛される診療所となるようにいたしたいと思っています。★どうぞよろしく見守りくださいますよう。

【診療時間】

午前9時から12時30分 その後往診。

午後4時から6時まで(月・火・水・金)

日曜祭日は休診としていますが、急病の方の診察はいつでも可能です。訪問看護やっています。

【在宅ホスピスを広めよう】

今までも家で亡くなっていかれる人へのお世話をさせてもらっています。家で最後の日々を過ごすことは、病院や施設には比べられないくらい自由で温かい世界を作り出すことになります。今後、より一層、在宅ホスピスに力を入れていきたいと思っています。どうぞよろしく。

【著作】 35冊以上

「野の花の入院案内」講談社から刊行。2006.11

「老いるもよし」岩波書店から刊行。2005.03

「野の道往診」NHK出版から刊行。2005.02 「きょうの健康」連載 など

【講演内容】

○野の花診療所はパラホスピス。20床以下なので無認可。

これからホスピスは多く出来ようが、認可されると墮落が始まる。

○主訴には恩がある。

そう自分で自分に言い、己を縛る。自分が自分を縛るのは許せる。

○医療者は多くの触手を持ち、広げる努力をして、患者とつき合う必要がある。

何もせずに「あの人とは合わない」では駄目。

○ホスピスが広まる前に、人はどう生きていくかを見つめる必要がある。

今の日本人はただ生きているひが多い。

○患者から多くのものを学んだ。

人間の悩みは多く興味深い。どんな人間も尊い。

生命を持っているものとして尊い。これだけ人間の数を維持しようとしている人間の傲慢さはよくない。動物臓器の移植などはとんでもないこと。

○臨床をくぐることは凄まじいこと。

(ある看護師のターミナル現場の苦悩例)

患者が私の傷つく事を言ってくる。結局、相手の気持ちになって考えることはできても、その立場にならないと判らない。主治医が何ヶ月の命というのを、自分は「何日」と考え、自己嫌悪に陥る。患者を受容できる気力がない。私は逃げ出したい。

○ビー玉は消える。されど海の底に確実に存在する。

一般に、親が子をゴールから見るように医者もそうしがち。ゴールから見れば正しいと考えてはならない。患者と「伴走」することが大事。

○Unlearn

*ヘレンケラーの言葉：「大学で多くのことを学んだ。卒業して、その学んだことをほぐし編みなおす必要があった。」

*医療でもUnlearnが必要＝臨床の重要性

*ピッチャーはバッターから学ぶように医者は臨床で患者から学ぶ

○臨床現場の生々しい話（看護師のアンケート読み上げ）

○質問 訪問看護をしている。一日も早く楽にしてくれと訴えられ逃げ出したい。

早くお迎えが来て欲しいと思う自分が嫌になる。